2024・2号

直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

54号
2024・7-2024・12

◉特集◉

令和6年 能登半島地震

―港町1・2丁目の取り組み―

◉特集◉

第四一〇回 〝旅する祭り〟祇園祭

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

自然がクリエイティブの源

まるやまえみこ

もう一度、地域の歴史をゆっくりと探ってみる

紫式部の父 藤原の為時が赴いた

〝越後国府〟と〝駅家（うまや）〟のなぞ

歴史は「今日」への手紙

北越戊辰戦争の記憶

自然がクリエイティブの源

イラストレーター　まるやま えみこ

昨年、六年ぶりに上越市へ戻ってきました。

長年の夢だったアトリエを構え、最初に水道水を飲んだ時の感動がいまだ印象に残っています。

「あま〜い！」

そう、上越市の水はとても甘くて美味しかったのです。その時、「ああ、上越市に帰ってきて良かったな」と、ふわっと感じた自分がいました。

ところで、私はクライアントさまのご依頼を受けてイラストを描く仕事をしています。現在は児童書、教育出版、健康や医療の出版物のイラストを主に請け負っています。表紙イラスト、ポスター、シールやグッズ、昨年は「年末ジャンボ宝くじ」最近では「能登半島地震被災地支援ドリームジャンボミニ」にもイラストを採用いただきました。

これらの仕事は、広く国民の皆さまのもとに届けられています。私がクライアントさまから期待されている表現は、人々に受け入れられやすい「可愛らしく」「分かりやすい」ものであること、そして「創作的」であることです。

長年、この仕事に携わってきて幾度となく投げかけられた言葉があります。

「イラストを描いているなら、都会にいないと刺激がなくて駄目だね」

私は心の中で思います。「人が作ったものの中にいろと？」発展した都市はすべからく誰かが創り出したもの。その枠に囲まれた中での創作には限界を感じてしまう自分がいます。同じ味しかしない既製品のようにつまらない気持ちがしてしまいます。

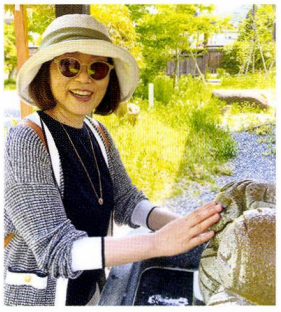
実のところ、忙しい時には一日に一〇点以上ものイラストを創り出しているその創作の源は自然です。

ですから、上越市に帰ってきて、さっそく高田城址公園周辺と関川の河川敷をウォーキングするのが日課になりました。歩きながら、川の流れや季節の植物や遠くの風景、空を見上げて、次の仕事のアイデアを練ります。イラストの構図は自然が教科書です。それらは実に美しいバランスで成り立っているからです。プロのイラストレーターとして、皆さまにとって飽きがこないイラストをこれからもご提供していきたいと願ってやみません。

最後に、今年は九月に直江津で開催される「なおえつ　うみまちアート二〇二四」にて、描き下ろしの作品を展示する予定があります。「テーマに沿うか沿わないか」問題を自分に問いながらイラストを描きたいと思っています。詳しい告知は後ほど別の媒体で。何卒よろしくお願いいたします。



イラスト：まるやまえみこ



まるやまえみこさん

イラストレーター。東京都内の広告代理店のグラフィックデザイナーとしての経験をもとにイラストレーターとして独立。イラストレーターキャリア三四年。上越市→東京→上越市→新潟市を経て上越市に二〇二三年アトリエを構える。

地元で活躍中の「けんしん君」のキャラクターデザイン（株式会社レンタルサービス様マスコットキャラクター）／「かまぶたくん」キャラクター&グッズ制作／上越市の雪をテーマにしたデジタル絵本「おかあさんのゆきみち」Amazon Kindleも発売中

令和6年 能登半島地震
――港町1・2丁目の取り組み――

平成六年元旦の一六時一〇分、正月気分を吹き飛ばす、今までに経験したことのない強い揺れに襲われました。

気象庁は「令和6年能登半島地震」と命名しました（令和五年五月五日に発生し、石川県が「令和5年奥野能登地震」と命名した地震も含む）。最大震度7、マグニチュード7・6を観測し、能登半島全域に甚大な被害をもたらしました。上越市は震度5強。新潟県内各地で被害が発生しましたが、地震発生から半年後の今も、液状化現象や田んぼなどに目に見えない被害がじわじわと広がりを見せています。

市内の港町は、地震発生後約一〇分で津波が到達し、住民は恐怖のなか避難を余儀なくされました。港町は、上越市のハザードマップによって町内のほとんどが洪水や津波の被害があると予測されているため、年間を通して避難訓練を行い避難場所や避難時間の確認を行ってきました。そのなかで避難訓練と今回の地震での実際の避難傾向などを防災士の泉秀夫さんを中心に住民アンケートを取り、今後の備えに検討を重ねています。

その貴重なデータをお借りして本誌に掲載することにしました。データを読み取っていくと、避難の方法や避難開始の判断を常に考えて行動できるようにする必要性を実感します。内容について多少整理しましたが、基本データには変更しておりません。

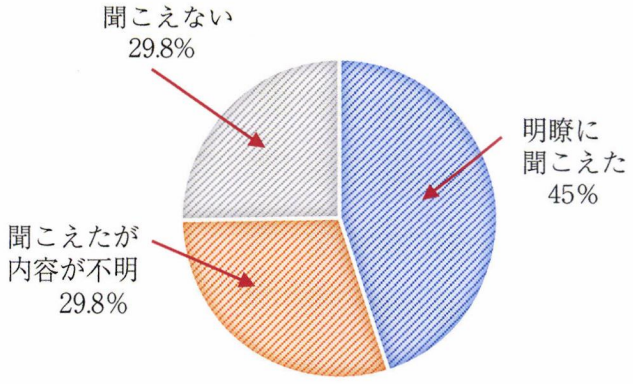
付記、編集中の六月三日午前六時三一分頃、能登半島で震度5、上越市でも震度4の地震が発生しました。

なお上越市では「洪水ハザードマップ」（令和三年）、「津波ハザードマップ」（令和五年一一月改訂）、「防災・避難所ガイドブック」を全戸配布しています。

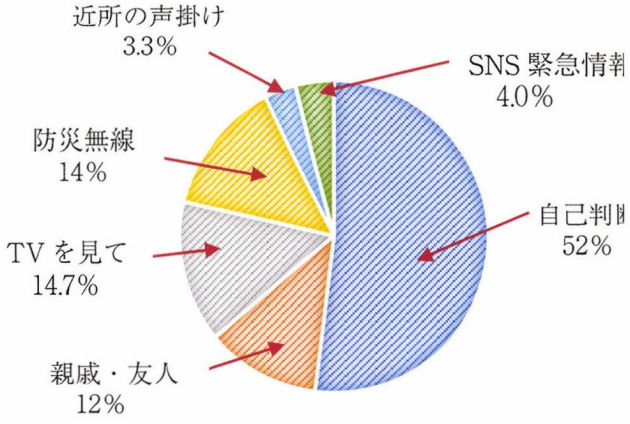


関川を遡上する津波のスピード（泉秀夫作成：Google マップより）

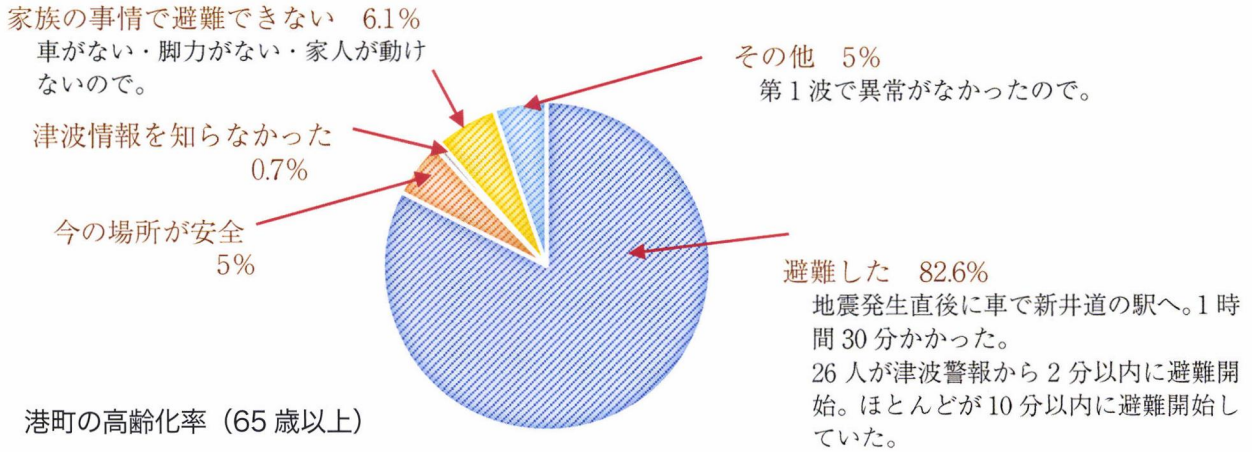
防災無線の効果



今回の震災発生時の避難意思決定



津波警報発表時の避難行動の判断



港町の高齢化率（65 歳以上）

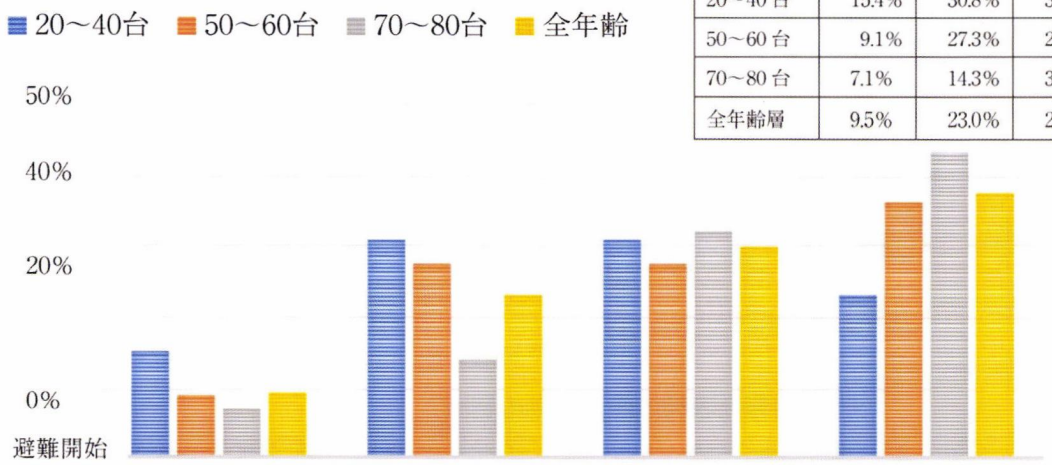
	人口	高齢化率	男性	女性
港町全体	794	36.8	29.0	45.8
1 丁目	521	43.4	37.8	48.7
2 丁目	273	24.2	16.2	38.0

港町 2 丁目には信越化学独身寮があるので、高齢化率は 1 丁目の 43.4%が町全体を現していると思われる。港町総人口と高齢化率、円グラフの「家族の事情で避難できなかった」を掛けると、港町全体で 21 人が避難の手段がないことが分かる。

■データ作成・提供　防災士 泉 秀夫

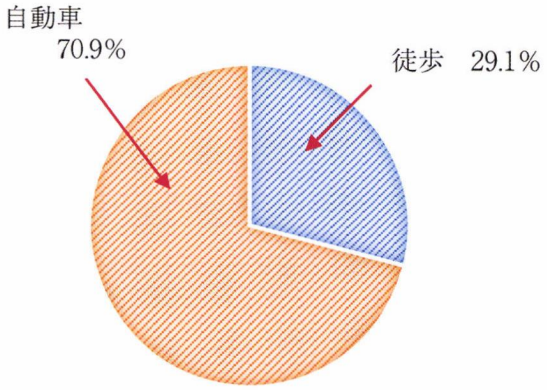
新潟県自主防災コーディネーター・新潟県防災シニアリーダー・上越市防災アドバイザー・上越市防災士直江津支部会長

年代別避難行動開始時間

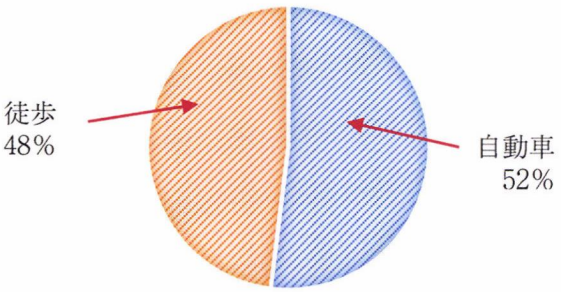


開始 / 年齢	16:10～16:13	16:13～16:16	16:16～16:25	16:25～以降
20～40台	15.4%	30.8%	30.8%	23.1%
50～60台	9.1%	27.3%	27.3%	36.4%
70～80台	7.1%	14.3%	32.1%	46.4%
全年齢層	9.5%	23.0%	29.7%	37.8%

避 難 方 法



旧古城小学校への避難方法

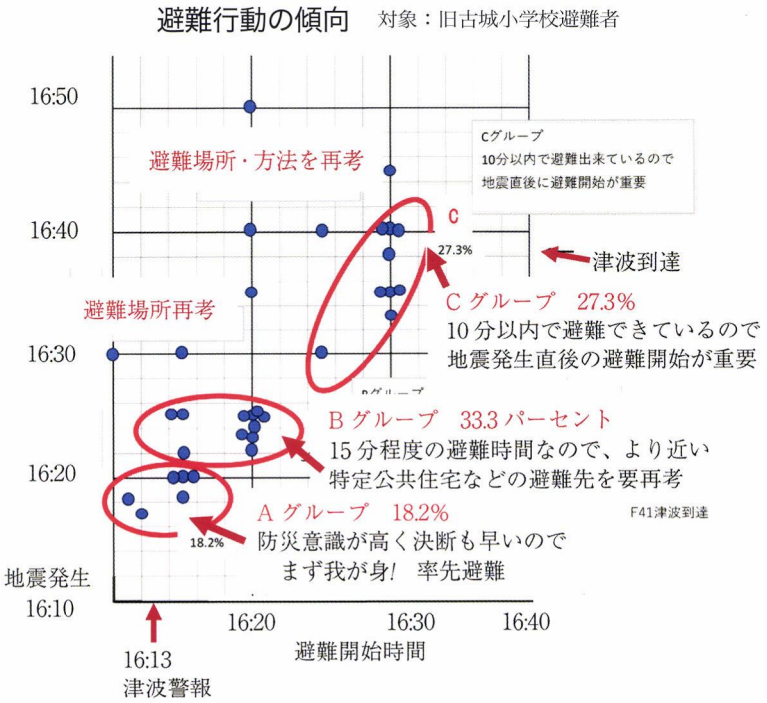


町内には上越市指定津波対策の緊急避難所が佐渡汽船、直江津港湾合同庁舎、旧古城小学校、港町特定公共賃貸住宅、信越化学（株）古城独身寮の５カ所、それに加え高助リバーポートマンション（港町指定）があります。

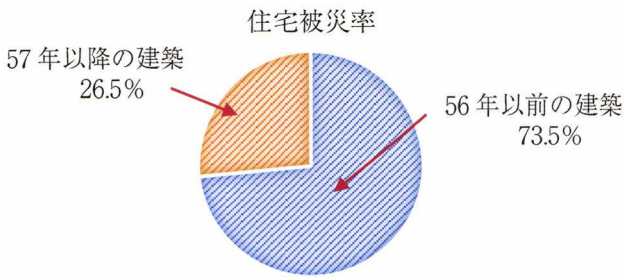
しかし、今回の震災では新井道の駅、春日山、イオン上越店まで車避難する人もいましたが、大半は旧古城小学校に集中しました。平成 23 年から年から始めている津波避難訓練では、上記６カ所へ分散避難すべく行ってきましたが、海に向かって避難する不安や群集心理の働きもあったのでしょうか旧古城小に避難が集中しました。



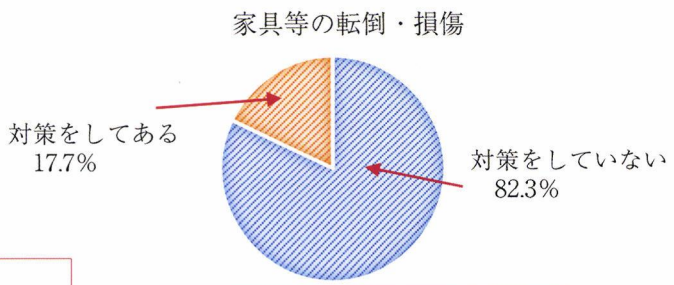
家具の安全対策の効果



「新耐震基準」適用前と適用後の住宅・家具等の被災比較



港町全体の被災率は 28.8%（調査数 160 戸）
※新耐震基準　昭和 53 年の宮城県沖地震を受けて建築基準法の耐震基準が改正され「新耐震基準」と呼ばれるようになり、平成 7 年の阪神淡路大震災を受け、平成 12 年に再び改正され「新・新耐震基準（2000 年基準）」が適用された。

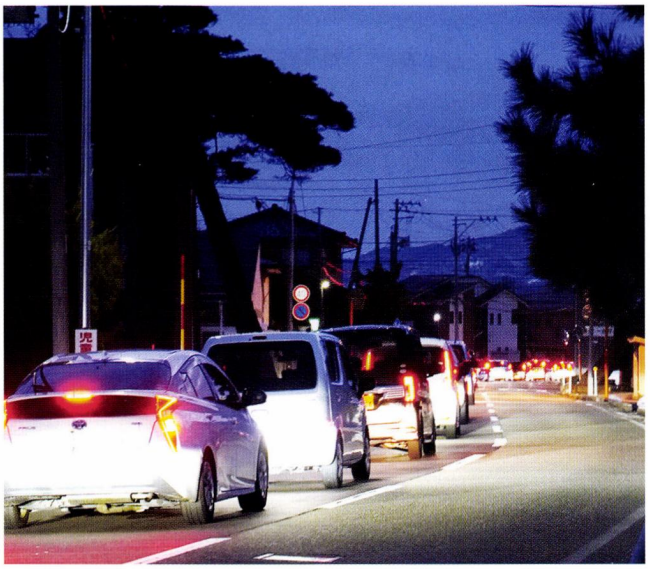


被災率 54.4%
対策をしてあったという回答のうち、新基準以前と以降と同数だったので、揺れ方よりも家具等の配置方法を考えた方が良いのではと考えられる。





関川の祇園神輿が揚る斜面を津波が遡上。翌朝、後片付けをする人。「死ぬかもしれないと思った」と話していた

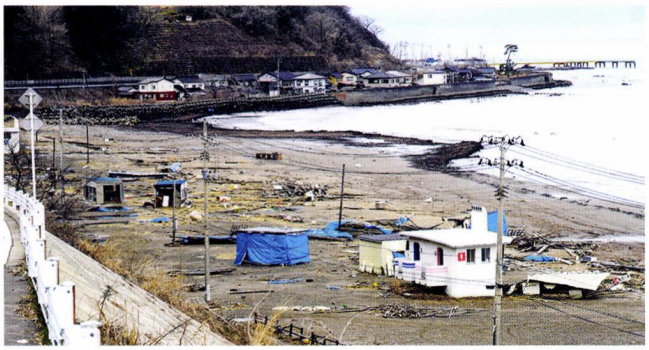


避難の車で渋滞する加賀街道（1月1日　16時49分）



2014年3月撮影のなおえつ海水浴場





上・右　津波が襲ったなおえつ海水浴場





旧商家の明治４年築の「内蔵（うちぐら）」が崩壊
商家に多い母屋と軒続きに建つ「内蔵」と直江津独特の母屋のなかに土蔵を取り込んだ「座敷蔵」があるが被害の実態は不明だ





蕨手の笠が特徴の春日灯籠が多く倒壊している
（安政２年奉納）



笠がシャープな曲線の灯籠は、ほとんど宝珠だけが落下している（明治15年奉納）

◆新潟県無形民俗文化財（風俗習慣）「直江津・高田祇園祭の御旅所行事と屋台巡行」（平成 29 年指定）
◆文化庁認定日本遺産「荒海を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」

第410回〝旅する祭〟祇園祭



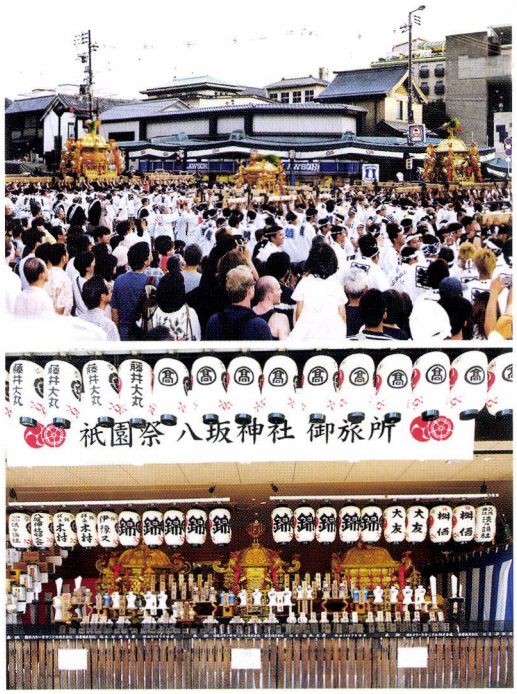
還御する祇園神輿

祇園祭（祇園会）とは

祇園社（祇園感神院）と祇園会（祇園祭）の始まりは、貞観一一年（八六九）全国的に流行した疫病や天変地異は牛頭天王の祟りであるとして、勅命で日本の国の数である六六本の鉾を立てて鉾の先に悪霊を集めて穢れを払い、祟りを鎮めるために牛頭天王を神輿に乗せて担ぎ出して、悪霊退散を祈願したのが祇園御霊会で、祇園祭の起源だと言われています。

直江津の祇園社はいつ勧請されたのでしょうか。「直江津町史」（白銀賢瑞・昭和二八年刊）は、越後守護代長尾能景（のちの上杉謙信の祖父）が八王子社（祇園社）の神職戸田氏に宛てた明応四年（一四九五）の文書を最古の資料として紹介しています。一国に一つの神社ですから国府の時代に勧請されたという説もあります。

明治の神仏分離で本家京都の「祇園社」が八坂神社と改名したため、直江津でも八坂神社と改名し、祭神もスサノオノミコトになりました。神仏習合の世界では牛頭天王と同じものと考えられています。



京都祇園祭
山鉾巡幸の後、３基の神輿が京都市内を巡幸して四条通の御旅所で一週間滞在する

旅する祇園祭

この祇園祭が高田城下へ出張して行われるようになったのは、慶長一九年（一六一四）松平忠輝が福島城から高田へ城を移し城下町も移転させた（今年で四一〇年）ので、直江津が衰微するのを恐れた神官が百石の朱印地を辞退し、そのかわりに高田まで出向いて祇園会を執行することになった。という説が「直江津町民の矜持」という側面も併せて伝えられてきました。

この「旅する祇園祭」について、平成二九年に龍谷大学社会学部社会学科が行った社会調査実習の報告書で、調査を指導した吉田竜司教授が興味深い考察を行っています。

京都の祇園祭は、洛外の祇園社から神輿が洛中へ出向き、御旅所に一週間滞在して盛大なもてなしを受ける「御旅所祭礼」であり、直江津の祇園祭は、砂山村に鎮座する祇園社が祇園会のために〝直江津〟へ神輿が出向き、御旅所でもてなしを受けていたのではないかと推理し、「越後頸城郡誌稿」（稿本大正一二年・版本昭和四四年刊）の―往古国府の時より直江津砂山に鎮座あり。府内の祇園会は当社にて執行し、例年神輿、府内各町を巡幸あって、継いで福島城下に移り又高田市街に移る旧例にして、この祇園会執行と朱印地を賜ること、二途のいずれか一途を望むべしと、その筋（高田藩）の達しありけるに、当社に於いては朱印地に代りて、この祇園会（御旅所祭礼）を望みしものなりと伝えたり―。に着目して、町外から町内（砂山村から直江津）、城下町外から城下町内（直江津から福島城下）へという古来の先例を「朱印地拝領で

はなく」新たな高田城下でも踏襲させることで、「御旅所祭礼」という格式を維持しようとする選択が、祇園社が直江津にとどまった要因ではないかと述べています。

「新城下建設のためにすべての権益を奪われた直江津が衰微するのを恐れて」という言い伝えは、古来からの格式を重んじ維持させようとする神社の強い姿勢の反映であり、それを「直江津の矜持」として捉えて伝えられてきたとしても不思議ではないでしょう。

旅する祇園会

祇園会（以下祇園祭）の日程については、渡辺慶一著「越後府中文化」（昭和二六年刊・昭和四七年復刻改題「越後府中地方史研究」）が、江戸時代からの祭礼の内容と日程を書いています。

旧暦の五月（新暦六月）下旬、高田藩へ祇園会を執行したい旨の願書を提出します。六月一日、高田お馬出の辻にしめ縄を張り、四方に藩の山から切り出した松と竹を立て、紋幕を回して御旅所を設けます。そして町年寄りの森、磯野、吉田、池田家から高張提灯が奉納され、高橋孫左衛門家からは行燈が毎年奉納されます

六月六日（新暦七月六日）、高田からのお迎えによって神輿は車に乗せられ、正門である現在の北参道鳥居を出て左に折れ、突き当たって左折して府中八幡宮の東参道入口の前を南に進む今町道を直江津の丁頭が付き添って陀羅尼八幡の御旅所（古くはお馬出しの御旅所に入った）に到着します。

翌七日は表通りの町内を巡幸する表祇園で、夕方お馬出しの御旅所に入り一四日まで滞在、この間の夜を宵宮といい大変な賑わいだったといいます。一四日は職人町を巡幸する裏祇園。そして夕方、稲田橋畔で稲田の人たちによって、神輿は御座船に乗せられて直江津へ環御します。この間の祭典や神輿の費用は明治時代まですべて高田の町の負担でした。

直江津の祇園祭の期間中、大きな釜にお湯を沸かして笹を熱湯に浸してそれを体にかけ、その年の吉凶や無病息災、五穀豊穣を祈る「湯立神事（ゆたてしんじ）」も行われていたということです。

高田の御旅所に一週間滞在するという日程は、明らかに京都の祇園祭と同じであり、先の吉田氏の論考のとおり高田城下成立当初から「御旅所祭礼」として高田へ出向いていたと考えて間違いないでしょう。

祇園祭のエピソード・日程の変更

高田城下での祇園祭の記録として、高田藩制史研究」（昭和四五年刊・資料編４・中村辛一編）を見ると、「安永二年（一七七三）、雨で神輿が還御できず山王社（日枝（ひえ）神社）へ移す」という記録や安永三年（一七七四）に「九町内から祇園屋台が出て殿様がご覧になる」という記録もあります。興味深いのは、明和四年（一七六七）に加賀の殿様が参勤交代の途中で高田にお泊り（下小町＝本町六丁目に加賀藩の陣屋があった）になるので、一〇日の夜宮は「遠慮」するように、御旅所は幕を下ろし　提灯灯籠等は出さないようにというお触れが出ていることです。

「高田市史」（大正四年版・布施秀治）によれば、安永三年に出た屋台は、日枝神社の山王祭に曳き出されていたものであり、この年、祇園祭にも出されるようになったものといわれています。寛政六年（一七四九）には、

屋台巡行の順番についてもめごとになり、藩からお達しが出るほどの賑わいでしたが、慶応年間には屋台の巡行が途絶えたということです。

この屋台の山車飾りは、上越市立歴史博物館所蔵の「獅子牡丹」と「孔雀」の二基のみで、どのような構造の山車（屋台）であったかはわかりません。

祇園祭の期間は、昭和三六年までは古来の伝統が守られてきましたが、高田本町商店街の都合や神輿が一週間も御旅所に滞在することが時代的に受け入れられなくなり、たびたび日程が変更され、昭和四八年から現行の日程になりました。現在の日程は次のようになります。



関町の出し飾り　孔雀
上越市立歴史博物館蔵

地鎮祭・七月一四日　高田御旅所地鎮祭、二二日　直江津御旅所地鎮祭（日程変更もあり）。

発輿祭・二三日　高田の祭典委員と直江津の氏子により執り行われる。

神輿は台車に乗せられて、上越大通りを縫うように旧今町道を行き、沿道の町内の礼拝を受け、高田の入口にある白山神社で高田の祭典委員と地域の人たちの出迎えで陀羅尼八幡御旅所に到着。

表祇園・二四日　本町通りから関町口まで渡御。

神輿は同じ道は担がない習わしなので台車に乗せられて引き返し、お馬出し御旅所へ。

御旅所祭・二五日　一日滞在。

裏祇園・二六日　大町五丁目の端まで台車で運びここから担がれて大町通を上り、寺町の一部を巡って仲町通り、東本町を稲田橋左岸まで担ぐ。ここで高田での祇園祭が終了。

稲田橋左岸の暁光公園に到着した神輿を稲田地区の人たちが奪い取るように担いで稲田橋を渡り、関川右岸の稲田橋下で御座船に乗り直江津へ還御。

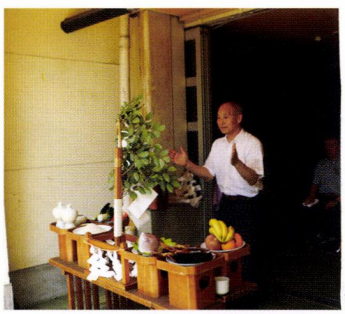
関川を船で下るというのは、神輿は同じ道を通らないという慣わしによって陸路では同じ道になるので、川下りになったのではないかと考えられます。

なお、稲田地区は氏子ではないので町内を担いで回っても神官は同行しません。

着輿祭・神輿は荒川橋左岸の下手で上陸。連合青年会の代表が担ぎ、荒川町の人たちに渡されて御旅所へ到着。

神輿巡幸・二七日　御旅所に滞在。

神輿巡幸と還御祭・二八日　神輿は直江津地区の残り半分を渡御、本来の参道である北参道を御幸町（砂山区）





御旅所地鎮祭
上　高田お馬出し　下　直江津三八朝市通り

によって担がれ八坂神社へ還御。

例大祭・二九日　祇園祭終了。

新聞で見る明治以降の祇園祭の賑わい

明治になると祇園祭の期間中、連日のように新聞で報道されるようになります。明治四四年には稲田からの川下りを高田歩兵五十八連隊の鶴見大尉と共に「この稀有の行事」をレルヒ少佐が見物したと報じ、直江津での賑わいを「金屏赫奕（きんぺいかくえき）たり」（金屏風がかがやく）という見出しで、「市内小学校はもちろん、各戸業を休みて戸々国旗、琉燈（りゅうとう）（灯籠）を掲げ、店頭は小奇麗に飾り立て、眩

上 中　北本町の白山神社で神輿を迎え陀羅尼八幡の御旅所へ

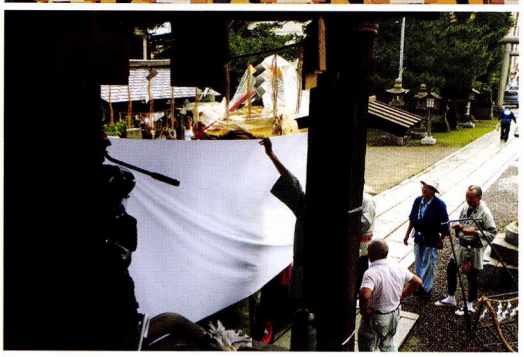
下　24 日、城下の表通りを渡御する表祇園南本町を旧伊勢町口番所まで渡御して折り返し、帰りは台車で運ばれる















発輿祭
高田の祭典委員と直江津の氏子によって行われ、台車に乗せて高田へ向かう

ゆき金銀の屏風を立廻し、赤の御飯に一日の歓を尽くせり……」と書きたてています。

大正二年の「大小五艘の奉迎船は八坂丸をかたどり満艦飾を施して荒川河上に浮べ、笛や太鼓で神輿を迎え、八坂丸に因める子供達の万灯も数区より出され、囃子や掛け声も面白く町内を練り歩く」という記事、大正四年には青年会主催の煙火が盛んに打ち上げられ、迎え舟・見物舟で河口充満し「壮絶快絶の美観」を呈するだろうといっています。また直江津の「二四区中二一区が引船屋台を造り（二台も出す町内があって二四台になった）、浴衣姿の若衆は笛太鼓で拍子を取り、少年は火消し姿、少女は花笠の扮装で綱を引き、紅提灯の数は大空の星よりも繁く……」と、踊るような記事があり、少年達は小曳舟を担ぎ、芸妓連も屋台を出して、屋台製作費が全町内で四千円かかったと言っています。

大正五年七月一五日、直江津駅下車一〇二二（二等三〇人、三等九九二人）人中、六百余人は高田からの見物客で平日の二倍の乗降客があったといいます。







上 中　神輿の宮入
下　御旅所祭　25 日は一日滞在

この年、屋台の御撰米を午後七時半頃から八坂神社へ奉納するという記事も見られます。

一八年には、「高田の祇園では、通りにルーズベルト・チャーチルの似顔絵に突撃する刺突台が設けられ、戦時下の祭典にふさわしいものであった」という記事あります。

戦後の昭和二二年七月一五日付「新潟日報」は、一四日夜は、川下りの昔を偲び灯篭流しがあり、翌日は各町内が競って屋台を出し、同時に行われる商工祭りには素人演芸の花自動車、信越（信越化学工業）・ステンレス（日本製鉄）・日曹（大平洋特殊鋳造）の懸賞金付仮装行列が町内を練り歩くと報じています。

二五年になると、少しずつ戦後の復興が始まり世の中が落ち着きを取り戻し、この年から現ＪＲ荒川鉄橋の下流あたりから、直江津だけの川下りが始まったようです。

二六年、観光協会の底抜け屋台の登場、ぎおん・佐渡周遊観光の募集。二八年には信州から貸し切りバスで見物客がくり込んでいます。二九年七月一三日、市制施行

祝賀提灯行列が行われ、祇園祭とあわせてミス直江津を三人選出。一四日夜には、ナイヤガラ大瀑布や水中スターマインで三万人の人出。三〇年は、全日本軟式卓球選手権大会が開催され、川下りの光景が選手団の目を奪い、七万人の人出で大賑わいだったという記事が見えます。

なお、昭和三三年から「港まつり祇園祭」という呼び方になり、昭和四六年、上越市発足により謙信公祭と合わせて上越祭りと総称されることになりました。

屋台

明治三三年に出された「直江津繁盛記」という、官公







神輿は関川河口に接岸して、連合青年会によって担がれる







稲田橋左岸で稲田地区へ引き渡され、御座船に乗って直江津へ

庁や名所旧跡、行事を紹介した冊子に「荒川橋」というタイトルで祇園祭の賑わいと、祇園祭に引き出される屋台の前身ではないかと思われる大変面白い一文があります。

維新前七月七日、七夕祭りとて市中各町より船形あり瓢箪あり丸あり角あり、思い思いの万灯籠を出し市街を回り、終わりに海中に投げる。この賑わいを見ようと近郷の老若男女大勢集まって市街のいたるところ立錐の余地がないほどであった。この港の第一の賑わいであったが、七夕などの五節句の廃止（明治六年）でこの行事も消滅してしまった。しかし、一四日の祇園神輿の奉迎として復活させ、「万灯籠を出して市中を回り」、あるいは荒川橋と永代橋の間に数一〇艘の船へ灯籠あるいは提灯を掲げて、太鼓をたたき笛を吹き囃子の賑わいは例えようがなく、両橋の間の水面は白昼のようである。下新町の妓楼にはこの賑わいを見ようと若者が登楼し、家々の軒下には提灯を下げ陸と水中に照らされて広い川も昼のようである。橋の上では群衆がひしめき巡査が奔走して注意を促している。その雑踏は筆舌に尽くしがたい。

神輿が橋のあたりに近づくと花火が打ち上げられ、神輿は河口に至って停泊する船のつつがないことを祈ったあと接岸すると町の惣代や組頭の立会いのもと神輿に損傷がないか改めてから担ぎ上げられて海辺を巡幸してから片原町の仮殿（御旅所）入る。

とあります。

大正の終わりころ、竿の先に装飾した燈篭付けてくるくる回しながら練り歩く山車が、灯籠を台車に乗せて引き回す屋台になり、昭和の初めに船の上に屋形が乗る今のような屋台の原型がポツポツ現れ、屋形が千石船（北前船）風になるのは昭和三〇年代以降のことです。

なお神輿の川下りに合わせて、荒川橋に屋台が出て迎えるようになったのは昭和四〇年代以降のことで、川下りに迎え船も出なくなり、少しでも賑やかにしようと始まったものです。





荒川町町内会によって御旅所へ



還御祭

御幸町町内会によって北参道（きたさんどう）から神輿は還御される

屋台・御饌米奉納





御饌米奉納





７月に入るとお囃子の稽古が始まる

梶棒がある屋台は珍しい





猿田彦像（瀧川美堂作）が乗る唯一の「山車」

直江津の屋台の特徴

新発田の台輪は三輪、村上のおしゃぎりは二輪で車輪が装飾されています。北陸の曳山祭りの山車は、高岡、伏木、八尾、城端の山車は四輪で御所車のような装飾がなされた車輪。新湊は大きな車輪ですが、ほとんど装飾されていません。いずれも山車に梶棒はついていませんのでそれぞれの方法で方向転換させています。七尾の青柏祭の通称でか山祭りは、巨大な車輪がついた四輪の山車ですが、方向転換が各町内独特な方法で行われるため、それが見せ場となっています。

直江津の屋台の車輪は地車と言われるだんじりの車輪のようなものでも御所車のような大きな車輪でもありません。タイヤで梶棒が付いています。かつてはトラックのシャーシに勾欄を回らせて屋形を乗せたものがありました。おまけにハンドルまでそのまま付いていました。なぜそのようになったかは分かりませんが、直江津人の自由な発想が作り上げたものでしょうか。

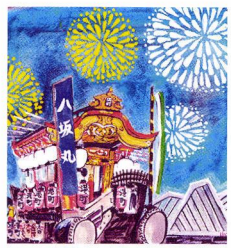
（北越出版）

イラスト屋
ひぐちキミヨが描く屋台


くじ取り式


5 御幸町


10 浜町

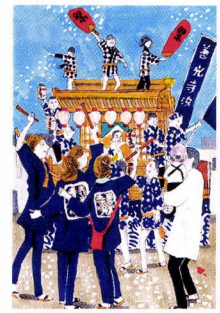

14 港町


15 栄町


16 八幡


11 塩浜町

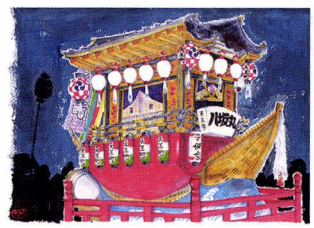

6 石橋1･2丁目


1 善光寺浜

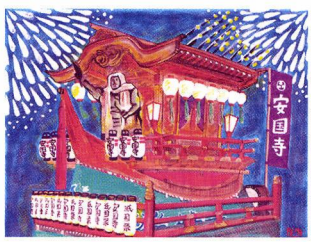

2 住吉町


17 福永町

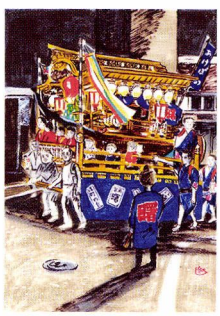

12 荒川町


7 天王町


3 本町・横町


18 安国寺


8 沖見町


19 あけぼの


13 東雲町


9 旭区


4 四ツ屋

※町名の前の番号は、2024年御饌米奉納順
※くじ取り式　笠原勇気さん撮影

紫式部の父 藤原為時が赴いた〝越後国府〟と〝駅家（うまや）〟のなぞ

小島幸雄

はじめに

五月二一日の新潟日報朝刊に埋蔵文化財センターで、企画展示が行われていることが報道されました。「出土品からたどる奈良時代から平安時代の上越」と題され、「越後国司だった紫式部の父～藤原為時～」というパネルがありました。センターがＮＨＫの大河ドラマ「光る君へ」を意識して上越の一面を描こうとしている努力を感じました。



令和６年度企画展
上越市埋蔵文化財センター

パネルに為時が越後国司だった期間が寛弘八年（一〇一一）から長和三年（一〇一四）とあり、上越地方では遺跡の少ない時代にあたっています。筆者が教育委員会で遺跡調査を行っていた時も「幻の十一世紀」などとその時代の遺跡の少なさを嘆いていたこともありました。事実今回の展示の冒頭に掲示されている遺跡紹介パネルでも、十一世紀の多くの時間帯が空白となっています。本稿でも空白は空白としてその前後の遺跡と、遺跡の調査から導かれる仮説によって為時が赴いた頃の頸城を考えてみます。

越後国府と国分寺の所在

古代史を語るときに欠かせない、越後国府と越後国分寺の所在について整理します。北陸地方はもともと越と呼ばれていて、持統四年（六九〇）年ごろには越前・越中・越後国が置かれたらしいのですが、その頃は阿賀野川まで越中国だったので頸城郡は越中国に属していました。大宝二年（七〇二）年に越中国から四郡を割いて越後国に属したとあり（阿賀野川以西の蒲原・高志・魚沼・

頸城の四郡）、和銅五年（七一二）に現在の山形県以北を出羽国としたことで越後国の国域が確定し、頸城郡は越後で最も都に近い郡となったのです。

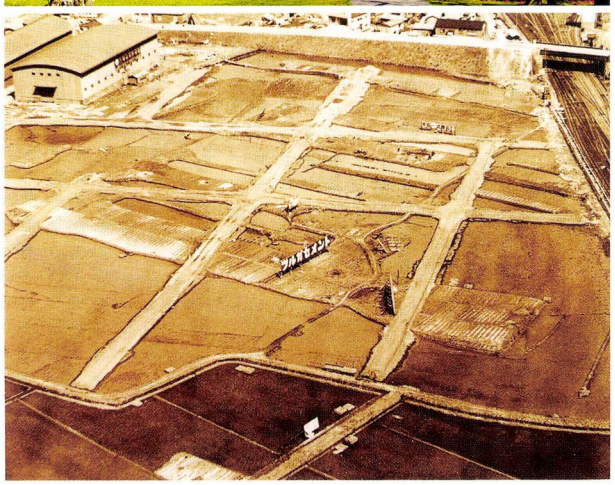
これまでの研究で全国の国府や国分寺が確定された例が増えていますが、それらを見ると国の中で都に近く、役所など公共建築が立ち並ぶ広くて安全な土地を確保できる空間の存在が条件となっていたようです。集めた税を都に送る、役人の赴任に交通が至便である、このような条件の土地といえば川や海に近いが洪水に強い段丘や扇状地のように比較的平坦な空間が求めやすい土地だったと考えられます。安全で安心な土地の選択は、土木技術が格段に進んだ現代とは比較にならないくらい比重が高かったと考えています。

越後国府は平安時代の承平年間（九三一～九三八）に成立した「倭名抄」に「国府在頸城郡」とあることから、古くから越後国頸城郡が国府所在地とされてきました。



銅印　江向遺跡出土
上教大前の宅地造成の発掘で出土
平安時代に使用されたもので「高有私印」と読める
（上越市の文化財）より





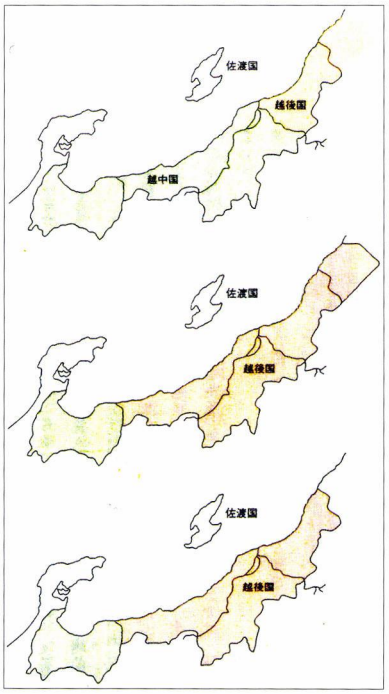
上　越後国分寺
下　昭和 39 年発掘当時の御館跡

明治に刊行された「大日本地名辞書」で著者の吉田東伍博士が直江津の「御館跡」を国府とし聖武天皇勅願の国分寺を五智の国分寺にあてるにおよんで、越後古代史の重要な二遺跡はゆるぎないものとなりました。しかし、後世の研究者によって「御館」は関東管領館であって古代に遡る遺跡ではなく、「国分寺」も永禄五年（一五六二）上杉謙信再興のものとされたことで、奈良～平安時代のそれぞれの位置比定は白紙に戻ったのです。

「新井市史・上巻」

昭和四八年に刊行され、加藤晋平先生によってそれまでの国府国分寺研究の成果と整理が記述されています。また越後国分寺の記述では、上越市本長者原地内で見つかっていた凸が突出した大きな石を国分寺の塔の心礎ではないかとされたのです。この石も古くから知られていて、





右　越後国の移り変わり（上越市史より）



上　奈良時代の越中の「郡」
左　奈良時代の須恵器　今池遺跡出土（上越市教育委員会提供）

平野団三先生によって注目されていたのですが、それも今は失われていて検証ができない現状となっています。

昭和五七年、今池遺跡の発掘調査が佳境に至り、国府推定地として斯界に大きく取り上げられることになりました。私も今池遺跡の発掘調査を何度も見学し、遺構の多さと大きさ、さらには多くの遺物に感銘を受けました。しかし、今池遺跡は多くの遺構が見つかっても核心部の建物（国府であれば整然とコの字に並ぶ掘立柱建物跡の国庁跡）が見つかっていないため国府とは断定できず、国府の一端を知る遺跡とは評価されたもののそれ以上踏み込んだ考えは示されてはいません。

郡の大きさは国に匹敵していた？

須恵器という焼き物があります。古墳時代から平安時代中期まで焼かれたもので、四世紀の終わりから五世紀の初めに大阪周辺の官営工場で生産が開始されて、全国に生産地が拡がりました。北陸地方を北上した須恵器生産の技術は六世紀の初め頃、富山県の神通川左岸の射水郡や婦負郡まで到達したもののそれ以北に進まずに停滞し、頸城郡に到達したのは七世紀の終わり頃でした。新川郡を飛び越えて頸城郡で生産が開始されるまで二〇〇年弱を要したのです。頸城郡はその頃は越中国に属していましたから、新川郡を飛び越えたとしても不思議はありません。

須恵器と直接の関係はわかりませんが、以前から気になっていることに郡の大きさがあります。越中国は神通川左岸に三郡（射水・砺波・婦負）があったのですが、神通川を超えると新川一郡なのです。神通川を挟んだ西の三郡の面積と東の新川一郡が同じような面積なのですから驚きです。そして須恵器の窯跡は平安時代に盛行する立山古窯跡群を除き見つかっていません。新川郡に先行して、後に越後国として国が分かれる頸城郡などの須恵器生産が開始されたのは、後の越後国の国域を変更す

◆訂正

「直江の津」五四号特集中、二二ページ「郡の大きさは国に匹敵していた？」の小見出しの一行目から二三ページ上段一行目まで、左のように変更させていただきます。ご訂正くださいますようお願いいたします。筆者

郡の大きさは国に匹敵していた？

須恵器という焼き物があります。古墳時代から平安時代中期まで焼かれたもので、四世紀の終わりから五世紀の初めに大阪周辺の官営工場で生産が開始されて各地に生産地が拡がりました。北陸地方を北上した須恵器生産は六世紀の初め頃、富山県の神通川左岸の射水郡に到達し、七世紀初めには新川郡西部に進みましたが、頸城郡に到達したのは七世紀の終わり頃でした。越中国に到達してから頸城郡で生産が開始されるまで、二〇〇年弱を要したのです。頸城郡はその頃越中国に属していましたから、人の往来によって技術が伝播したのではなく、国と郡の配置で須恵器生産が政策的に管理されていたと考えられます。

以前から気になっていることに郡の大きさがあります。越中国は神通川左岸に三郡（射水・砺波・婦負）がありますが、神通川を超えると新川一郡なのです。神通川を挟んだ西の三郡の面積と東の新川一郡が同じような面積なのですから驚きです。そして、新川郡の須恵器窯が生産を開始してから後に越後国となる頸城郡など四郡に須恵器窯が築かれるまで一〇〇年近くの時間を要したのです。親不知以東の情勢好転まで須恵器生産開始を待っていたと考えれば、頸城郡などの須恵器生産開始は越中国と越後国の国域変更の礎だったのかもしれないのです。

る礎だったのかもしれないと考えています。

越中国で新川郡の東に接するのは、頸城郡でした。大宝二年（七〇二）越中国から四郡が編入されて広大になった越後国は、西から頸城・高志・魚沼・蒲原・沼垂・岩船・出羽の七郡でした。この各郡の須恵器の生産開始を見ると、七世紀の終わり頃に頸城・魚沼・高志の三郡で開始され、以降八世紀終わりには越後国内各郡で焼かれたようです。平安時代には新川郡の須恵器窯も生産が盛んになるそうです。どこが爆発的に多いというよりは各郡でそれぞれ生産地をもつというような状況です。郡が大きく、郡ごとに須恵器の生産地をもっていたと言えましょう。須恵器は奈良時代の食器・貯蔵器の主役といえる焼き物なので、郡という政治単位に生産地を設けていたと考えられます。出羽郡が出羽国となって越後国の国域が確定するのは和銅五年（七一二）のことです。

私は、頸城の須恵器に東海系の技法が取り入れられていることを四〇年以上前に提唱しました。その後の遺跡の調査はそれを裏付けるものが多く、北陸だけでなく信州にも近い頸城郡の地理的要因、都との連絡路にも関係するのかもしれません。ただし、越の国から続く北陸道の一国である事実を抜いて考えるべきではないのです。

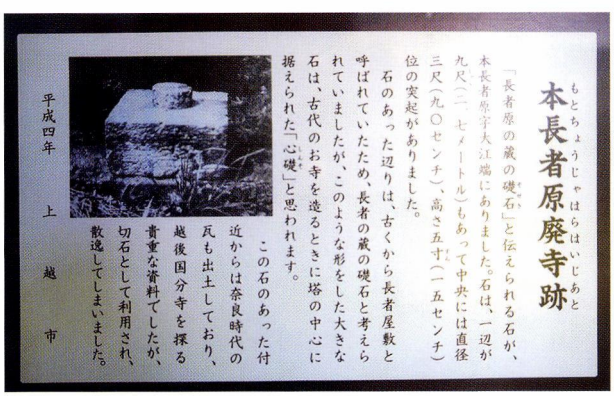
安芸国分寺塔跡の史跡標柱から

国分寺には塔が建立されました。塔には心棒があり、その下に据えられたひと際大きな礎石の心礎と呼ばれる石を中心に据えた基壇が築かれていました。写真は安芸国分寺の塔の跡の基壇と国の史跡指定を受けた時の標柱です。注意したいのは標柱の名称で、「安芸国分寺塔跡」となっているのです。史跡指定を受けた時には塔跡だけ認識されていたということになります。

前述のように本長者原出土の大石にも凸が突出してお



安芸の国国分寺塔跡の史跡標柱
出枘式の塔心礎が見える播磨国分寺塔跡



本長者原廃寺跡の説明板
出枘式心礎と考えられる模型の写真がある



茶屋が原の青木家
明治天皇巡幸や順徳上皇の歴史を物語る碑がある

平安の暮らし



滝寺古窯跡出土「円面硯」
（新潟県埋蔵文化財報告書より）





平安時代の土器
（上越市教育委員会提供）

り、これを塔の心礎と考えたのが平野先生です。先生は、「国分寺は別として、この地長者原に奈良朝の塔があったのではないかと空想した」と書かれています。しかし、ご覧になった時すでに大きな石を十分の一に縮小してあり、実物があればと悔やまれたことでしょう。

なぜこのように石を除いてしまったかというと、頸城という土地の特性によるものと思われます。頸城郡は越後ではとても安定した土地でした。平野の大半（河川の流路を除いて）が緩傾斜で、奈良時代にはいま私たちが見ているような地形が出来上がっていたようなのです。奈良時代から平安時代前期には平野のいたるところで古代人の生活痕跡＝遺跡が見つかるのはそのためです。ところが、ここに古代遺跡が分からなくなる原因が潜んでいたのです。平野が平坦であったため水田開発が早くから進み、中世の終わり、上杉氏の支配の頃から上江用水の開削が進められるなど平野のほ場整備がすすめられたのです。国分寺があったとすれば周辺よりひときわ高い基壇とその上に塔の心礎があったはずなのですが、頸城の人たちの水田への熱い思いが先人の偉大なモニュメントである古代寺院の塔の跡までも水田に姿を変えていったと考えられるのです。今見る景色からは想像できない景色があったと思われます。

名立の駅家（うまや）を通過した藤原為時と順徳上皇

現代も多くの車両が通る北陸道、今は国道8号と北陸自動車道がその役割を担っています。今年一月一日の能登半島地震で国道のわきの壁が崩落して通行止めとなり、北陸自動車道がその役割をすべて担っていました。とこ

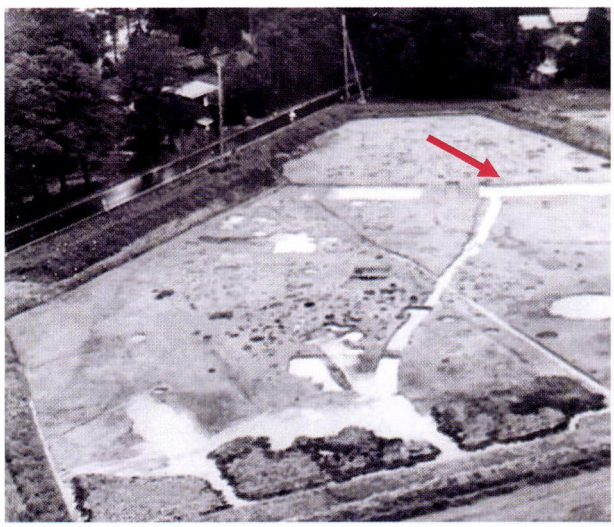
ろで、高速道が無料開放されていたので利用された方が多かったと聞きましたが、名立方面から直江津・高田へ向かう方で、国道8号線の「名立谷浜IC入口」の信号をインター方面に登り、ゲートの手前で脇にそれて茶屋ヶ原から国道8号に抜けるというコースを利用された方も多かったようです。もちろん、この道路の名立側は「主要地方道名立谷浜インター線」という、明らかに新しい道ですが、ここで少し想像をたくましくして古代にここを通ったであろう人物に思いを馳せてみましょう。

一人は「光る君へ」に登場する紫式部の父藤原為時です。為時は越後国司として赴任したとしたら、名立の駅家（奈良時代頃、都と地方を結ぶ官道が計画的に整備された。官道に沿って一定の距離ごとに置かれていた施設で、乗り継ぎ用の馬や宿泊施設が備えられていた）を通過したことは容易に想像できます。能登国を巡行した大伴家持のような詳細な記録を残したわけではないので、あくまでも任地に赴いたとすれば駅家を経過することは必然と想像しました。名立は任国内ですから、駅家の現状を視察しながら国府に向かうのは当然といえるでしょう。「市（一）の橋」一帯は古代から人が住んでいたことが発掘調査で確認されています（（一）は筆者記入）。

もう一人を挙げるとすれば、佐渡に流された順徳上皇です。上皇は流人として流刑地へ向かう途中ですから、駅家での確認、国府での通過確認は国司の大切な業務であったでしょう。流人とはいえ上皇ですから、国司たちの配慮の実態はどうだったのでしょう。伝承では名立に一泊された上皇を茶屋ヶ原の青木家の祖先が自邸にお迎えしたとあります。名立という駅家があったからなのでしょう。



横曽根遺跡出土品
中国元時代の青磁の碗や酒海壺などの威信財と呼ばれる高級品が出土している
（上越市埋蔵文化財センター）



横曽根Ⅰ遺跡
矢印が堀跡で後方の林が横曽根集落
（掘り起こされた中世のまちとくらしより）

「館之内」と「竹之内」

さて、藤原為時が国司だった一一世紀初めのころの上越はというと、前述のように平野のあちこちに営まれた奈良時代から平安時代前期の人々の生活の跡は廃墟となり、その頃の遺跡は皆無といってよいほど見つかっていないのです。長雨で平野が湿地帯となり住む土地としても稲作耕作地としても利用ができなくなっていたのかもしれません。

このような状況で遺跡から知り得る古代の情報が限られていることから、遺跡が増える中世に下って発掘調査で地下から掘り出された遺構や出土品から頸城郡の景色を想像してみましょう。三〇年ほど前から気にかけて探してきた小字があります。「館之内（たてのうち）」と「竹之内（たけのうち）」です。「館之内」の館は音で変化してしまったと考えられる「立之内」なども含みます。また、「之」は「の・ノ」も同じとして考えます。「竹之内」と「館之内」から名立の駅家の位置比定を試みてみます。

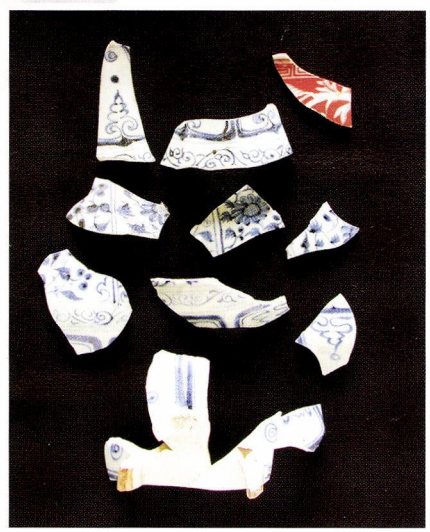
平成五年、市内横曽根の字「竹之内」地内での発掘調査を行いました。横曽根Ⅰ遺跡といいます。水田の耕作土を除くとすぐに基盤の粘土層が現れました。粘土層を掃除すると幅五～六ｍの堀と考えられる直線的な溝が見つかり、中世の館として調査を進めて一五世から一六世紀前半に盛期を有する館と評価されています。横曽根地区には館が三か所もまとまって検出されていて（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡）方角も一致しています。三か所の館跡を比較すると堀の大きさが大きく異なることが知られています。Ⅰ遺跡の堀は幅が五～六ｍもありましたが、ⅡとⅢ遺跡ではそれほど広くなく、深さも一ｍ以下でした。Ⅰ遺跡の堀幅は守護所と想定されている至徳寺遺跡と同等のもので注目されるものでした。なお、「竹之内」という小字は横曽根ではⅠ遺跡に限られます。



伝至徳寺跡
堀跡の発掘、幅６～８ｍもある



伝至徳寺跡
室町守護所と考えられる伝至徳寺跡から出土
青磁の酒海壺なども出土している



威信財と呼ばれる元時代の染付や釉裏紅と呼ばれる破片も出土している

「竹之内」から思い浮かぶのは親鸞聖人の配所です。五智の国分寺に「竹の内草庵」と呼ばれる建物があり、親鸞像と伝えられる木造が安置されています。国分寺は正式には越後国分寺と呼ぶべきで、永禄五年謙信の再興になるものです。しかし、国分寺に参拝するたびに境内の周りの大きな土塁に目を奪われます。これなどとても寺院の遺構とは考えにくく、おそらく中世の有力者の館と考える方が多いようです。もしここに「竹之内」とされる土地があったとしたら、永禄五年以前の遺構ということになります。そして、「竹之内」は「館之内」御屋形様の屋敷を意味する音の変化といえるのではないでしょうか。

ところで、竹ノ内という地名で地下に館が埋まっていた場所がもう一か所あります。三和区鴨井竹ノ内です。府中ほど大きくはありませんが堀で区画された館が調査されています。調査されてはいませんが竹ノ内という小字は、横曽根に隣接する荒屋集落でも確認されています。

館は見つかっていませんが、「竹之内」という小字を紹介します。それは、「名立町史」に載る「小泊竹の内」です。しかし、ここは現在小泊ではなく厳密には元小泊で名立小泊の皆さんの耕地であって合併前から上越市域だったということなのです。数年前この写真に興味をそそられて名立の三浦元一さんと沢田繁さんに同道願って二宮正守宮司さんを訪問しました。小泊に耕地があるというお話の中で「家の住所は名立町だったけど田んぼの税金は上越市に収めていた。」という言葉が飛び出しました。私はその時、もともと（古代から）名立という北陸道の駅家はここにあって、千年以上の時間の経過の中で上越市域になった、と考えたのでした。思い浮かんだのは、天正三年（一五七三）上杉家軍役帳に出ている長尾景直という人物でした。

結論として「御館の乱で景虎についた景直が敗者とな

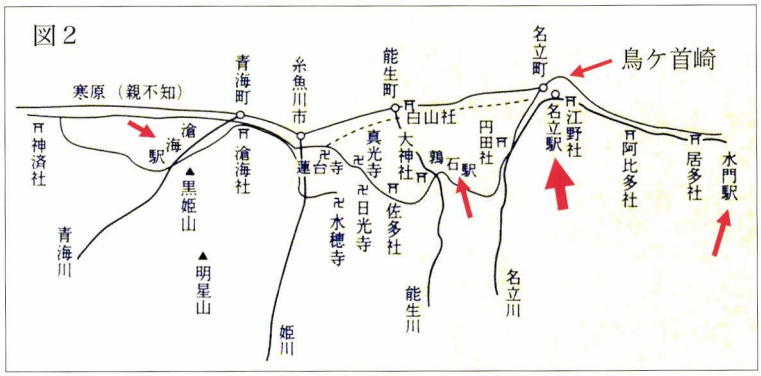


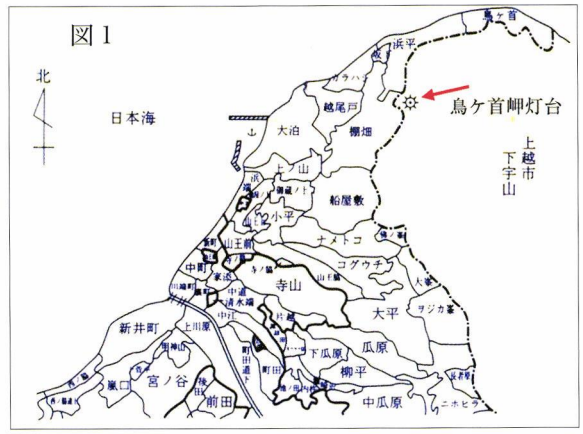
五智国分寺西側土塁のクランク状の切通





上　国分寺本堂裏の土塁　墓地になっている
下　国分寺裏門側に残る土塁







上 図１ 名立町（北端）小字一覧図（上越市下宇山と記された辺りが名立の駅家か？）
左上 図２ 延喜古道図
　駅家の推定位置が示されている
　（図１・図２とも名立町史掲載図に加筆）
左 「小泊地内竹の内付近」と説明があるが図１を見ると下宇山あたりになる（名立町史より）

り、西の防衛拠点と目されていた名立の地で眺望のいい景直の所領を没収して直轄領とした」、と考えてみました。直轄領にして館を破却したので御屋形様の尊称「館之内」を止めて「竹之内」と改称したと考えたのです。写真が「竹の内」（名立町史より）付近の図で大きくえぐられているところが直轄領として景勝の支配地になったと考えました。「越後頸城郡誌稿」の名立谷万象には宇山の名が無く、桑取谷万象に上宇山・下宇山が挙げられているのです。「館之内」と「竹之内」の音の変化を「御館の乱」の重要拠点の仕置きと考えられるのではないかと思っています。

なお、「御館」と「鮫ケ尾城」の館と目される「立ノ内」遺跡は、いずれも館＝立を使用しています。敗者でありながら尊称を継続したのは、関東管領の館として継続した「御館」と、「立ノ内」は信州への備えで継続した館であったことから景勝直属の武将が支配したとも考えられます。「竹之内」という小字が見られるのは横曽根Ⅰ遺跡の字竹ノ内と三和区鴨井字竹之内に限られます。それに西は茶屋ヶ原地内の「竹之内」、と国分寺の竹の内草庵であり、越後府中を核にして比較的狭い範囲に限られるところに「竹之内」を使用する意味がありそうです。

名立の「竹の（之）内」は駅家から続く地域支配の核か？

「名立町史」に地名で構成される一枚の図が載っています。この「名立町（北端）小字一覧図」（図１）を見ると大きくえぐられた空白があり、「上越市下宇山」（竹之内）とのみ記載されているのです。次のページには一枚の写真が掲載されて「小泊地内竹の内付近」とキャプションがあるのです。この部分を執筆された中村辛一先生がど

のような意図をもって下宇山と竹之内を併記されたかはお聞きすることも叶いませんが、同じく「町史」に載る「延喜古道」というキャプションの図（図1）を基に、私は次のように解釈しています。

古代北陸道の「駅家」として設置されたのは、図2の「名立駅」と書かれた場所と考えました。この図では具体的な位置が明確ではありませんが、図1の「上越市下宇山」のなかと推定しました。図2を見ると「名立駅」は名立川の右岸になっています。右岸の地はほぼ絶壁に近い急斜面で駅家の適地ではありません。それに江野神社は社伝によると、鎌倉時代に小泊から現在地に遷座したとあります。これらを総合すると、何らかの事情で竹之内（下宇山）を空白地にしたとみるべきだと思われます。

私の竹之内の変遷（試案）は、①古代の駅家が名立竹の内の場所に設置された、②鎌倉時代（社伝による）に江野神社が竹の内から名立大町地内に遷座して武家の所領となり竹の内を中心とした越後府中の防衛拠点が成立した、③御館の乱で景虎側についた長尾景直が失脚して景勝の直轄領になり後世に「館―タテ」から「竹＝タケ」と音に変化が生じた、なお、景直の旧領が山浦国清に与えられたとありますが、それは名立川右岸（図1参照）から西の徳合城の支配地域と考えられます。「竹之内」は「館之内」、支配者の館だったと考えてよいでしょう。

おわりに
（「こしのくに国府サミット」の開催）

平成二十五年に福井県越前市で初回が行われた「こしのくに国府サミット」は新型コロナウイルスのまん延で中断を余儀なくされていましたが、今年はようやく越後国府のまち上越市で開催されるようです。ウイルス禍によって延期になり、平穏な年になって開催時期と大河ドラマが重なりました。この機を逃すことはありません、市民を挙げて盛り上げていきましょう。

＊

ところで、発掘調査結果が多くの情報をもたらして古代の越後国府は平野の中央部の水害の少ない平坦地が選ばれたと考えられるようになりました。

しかし、中世の「府中」は明治以来、斯界の研究者が注目してきた直江津地区であることに異論をはさむ人はいません。移動したのは一二世紀頃、今から九〇〇年くらい前のことで、直江津駅南の地下から中国製の焼き物が出土（二六ページ）して注目されています。越後国の中心はその後も移動を繰り返し、高田築城をもって国府の移動は終わりを告げたのです。

元上越市専門学芸員



山桜が咲く宇山（竹の内）
27ページの写真と同じ位置

歴史は「今日（きょう）」への手紙

残しておくべきもの
伝えておくべきもの

北越戊辰戦争の記憶

慶応四年（一八六八）、新政府軍は鳥羽・伏見の戦いで勝利すると東征軍を組織し、北陸道は長岡藩を中心とする幕府軍の平定と会津藩征討のため、山縣有朋と黒田清隆を北陸道鎮撫総督府の指揮官として進軍しました。

直江津には新政府軍の宿所に、福永家など大きな商家が割り当てられ、また兵站基地として物資の運搬などに町民が割り当てられました。港町であるために船による兵糧の荷役などにも労苦を強いられ、町民の疲弊は大変なものであったと「直江津町史」にあります。

新政府軍の前には、佐幕派の古屋隊が林正寺で休憩して狼藉を働き、町民のひんしゅくをかったと言われています。また、高田寺町に幽閉された会津藩士が新潟経由で斗南へ向かう船の基地としても利用されるなど、直江津にとっては動乱の一時期だったようです。

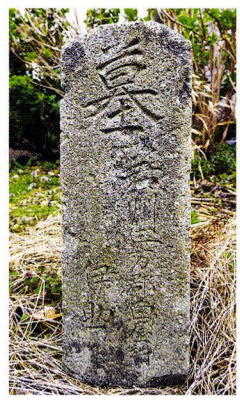
昭和三年に発行された観音寺の由緒によれば、山形・黒田に従って進軍してきた若狭藩は北陸道の先鋒を命じられていて、観音寺が宿所にあてられました。若狭藩士の中山正路とその従者の伊助が不幸にして亡くなり観音寺の墓地に埋葬されました。正路の墓誌には慶応四年八月五日、二五歳で病没したとあります。

また、北越銀行の位置に春日新田へ移転した光明寺があり、同じく宿所になっていました。光明寺の墓地にも若狭藩士の山田盛房の墓があります。中山と同日に、やはり病没したとあります。享年三一。

官費で供養料が毎年支給されていました。しかし、どのような病で亡くなったか、今は知るすべはありません。



中山正路
正路者若狭之藩士也…
…享年二十五卒観音寺



若州三方郡白屋村
伊助
慶応四戊辰八月二日



山田盛房
盛房者若狭国守酒井氏之藩士也此年慶応
戊辰之秋軍役旅北行焉至北越今町港罹病
□□行勝而中穐初没□寓舎享年三十有一
□□光明寺
右に並んで綾部清子という人の墓がある

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越後（かみえちご）全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

元旦の能登半島地震から半年が経ち、以前のような日常に戻りつつありますが、被災地では依然として苦しんでいる方も多くいると思うと胸が締め付けられるような気持ちになります。港町における今後の防災への取組みを読み、教訓を活かしていくことの大切さを改めて感じました。先人達も過去からの知恵を使い乗り越えたのではと思いつつ、様々な課題に直面している世の中が少しでも照らされるような直江津の花火が今年も夜空を輝かせてくれればと今から待ち遠しく思います。

（事務局）

目次

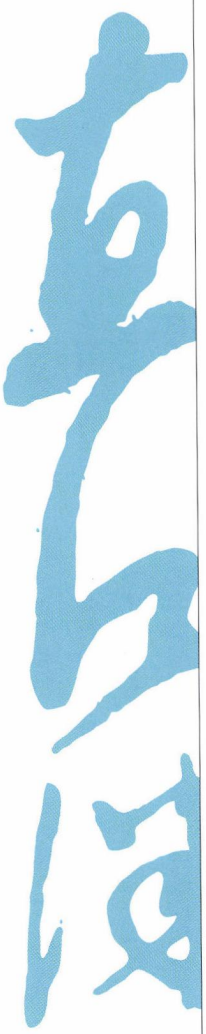
令和6年 能登半島地震
―港町1・2丁目の取り組み― 4
もう一度、地域の歴史をゆっくりと探ってみる
第四一〇回〝旅する祭り〟祇園祭 10
紫式部の父 藤原の為時が赴いた
〝越後国府〟と〝駅家〟のなぞ 20
元上越市学芸員 小島幸雄
歴史は今日への手紙 30
北越戊辰戦争の記憶
巻頭エッセイ・私の直江津
自然がクリエイティブの源 まるやま えみこ 2

「直江の津」
第二一巻二号 通巻五四号
発行日／令和六年七月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／小林正夫
問合せ先／上越信用金庫営業統括部
電話（代）〇二五（五四三）三一八四
上越市中央一―十一―一
制作協力・北越出版

2024・2号

直江の津

発行／令和六年七月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン



須布価格／五五〇円（税込）